



大学院医学薬学研究部

助教 笹尾 亜子さん (環境社会医学)

Sasao Ako

## ●プロフィール

1990年 熊本大学薬学部入学

1996年 修士修了

医学部法医学教室に勤務。助手。

2003年 熊本大学大学院医学薬学研究部助手

2008年 『抗マリア薬クロロキンの法中毒学的研究』の論文で博士号を取得。

楽しみながら学びと仕事を続けられ、道は必ずひらく。

## 実験と研究の楽しさに魅せられて

県内で異状死体の解剖を行うのは、熊本大学だけです。笹尾さんが勤務する法医学分野では、年間130~150体の解剖があるそうです。異状死体とは明らかな病死や自然死以外の死体で、他殺・自殺などだけではなく、災害死や老人の孤独死なども含まれます。執刀は医師が行いますが、解剖所見の筆記やその後の鑑定のための各種検査が法医解剖における笹尾さんの担当業務です。

鹿児島県出身の笹尾さんは、1990年、熊本大学薬学部に入學します。大学4年生の時の講座で先輩について実験補助を経験しますが、「新しい実験結果が出るたびに、先輩がすごく嬉しそうだったんですよ」。そこで実験と研究の楽しさを知ったそうです。そんな訳で、薬理学の研究室を修士受験をしますが希望者が枠より多く、第二希望の薬品物理化学の研究室で学ぶこととなります。最初は落胆もあったそうですが、同じ経緯をたどった先輩が薬品物理化学の研究室にいて、それがまた励みにもなり、とても楽しく学ぶことが出来たそうです。



熊本県総合防災訓練にて検視部門として参加

## 日本の現状にあった検査キットを開発中

「薬剤師の資格もある、鹿児島に帰って就職しようか」と考えたそうですが、ある日、「あなたは研究が好きみたいだから、行ってみたら」と教授に勧められたのが医学部法医学教室での助手の仕事でした。

「でも、人間の身体について何も知らなかったんですよ」。思った以上に仕事は厳しく、何度もめげそうになりました。大学院時代の教授に相談に行くと、教授は「本当にしんどいなら、辞めたらいいよ」と、さらりとおっしゃったそうです。そうあっさり言われてみると「いや、まだやれるかも」と、元気を取り戻したといいます。「根が楽天的なんですよ」と、笹尾さん。

中毒死が疑われる場合には、現場で、直ちにある程度のことかわかるような尿中薬物の簡易検査キットを使用します。現在日本各地で使用されているこのキットは米国製なので、日本でよく発生する薬物中毒の実状にそぐわない部分があるといいます。このキットを「日本の薬物中毒の種類と一致したものになりたい」ということで、笹尾さんは現在、キットの開発も研究されています。

就職してしばらくは博士号をとることに迷いがありましたが、現在では「こういった仕事に就く者にとっては、博士号の取得は越えなければならないハードルなんだ」と考えるようになりました。

## 人生に無駄なものはありません

結婚されたばかりの笹尾さん。薬剤師をしてちゃんと食べていけるだけの生活力を持っているせいか、「同級生には独身者が多いんですよ」。出産についての考えも、非常に揺れ動くそうです。「結婚して子どもを産んでも勤められるような職場でないと、雇う側も雇われる側も困るんですけどね。この仕事は慣れるのに一定の時間がかかるんです」。ですから、研究を続けながら子どもを育てている女性たちがどんなふうに生きているのか、とても知りたいと思っています。

「失敗やうまくいかなかった経験で、役に立ってないことってありませんよね。その時は大変な思いをしても、それに意味がなかったことってほとんどありません」と、笹尾さん。「その場その場で楽しんで学んだり仕事をしていれば道はひらけていくものです」。